

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	小島 正憲
最終学歴	学 位	専門分野
日本体育大学大学院体育研究科博士前期課程修了	修士	体育科教育（器械運動）

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

本学の教育理念（個を尊重した自由な校風の中で、他者から信頼される人格ならびに能力を有する自立した職業人を育成する）に沿って、学生を育てていく。

【目標】

本学における「三つの言葉」（建学の精神：真に信頼して事を任せうるじんかくの育成）／校訓：真面目／教職員の心構え：子弟を教育するは、私事に非ず。天に事（つか）うるの職分なり）を念頭に置き、学生指導に当たっていく。

【方針】

本学の校訓である「真面目」を基盤として、他者から信頼されるような人材の育成を目指していく。特に、「主体性を持って行動できる学生」「様々な問題に対して、柔軟で的確に対応できる学生」を育てていきたい。

【計画（方法）】

学生指導において「当たり前でできること（挨拶ができる、時間を守る、提出期限を守るなど）」を徹底する。加えて、学生の主体性を育てられるよう「アクティブラーニング型の授業方法（Think-pair-share、マイクロ・ディベート、多人数双方向型授業など）」を積極的に取り入れていく。

【担当科目】

（前期）

技術トレーニング演習、人間健康学、専門スポーツ実習（器械運動）、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、総合演習Ⅰ、保健体育教育法Ⅰ

（後期）

トレーニング実習、教職実践演習（中・高）、専門スポーツ実習（器械運動）、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、総合演習Ⅱ、卒業研究

○教育方法の実践

昨年と同様に担当授業の演習及び実技全般において、コミュニケーション能力を向上させるためにグループワークを積極的に取り入れた。そのことで、学生同士のコミュニケーションが取れて授業にまとまりができ、教員側としても非常に授業運営しやすくなった。

また、演習のことであるが「私の1週間の出来事」と題して、授業のはじめに一人3分間程度の自己プレゼンテーションを実施し、人前で話すことを習慣化させるようにした。

○作成した教科書・教材

昨年と同様に専門スポーツ実習（器械運動）及び教職実践演習において、授業の質を向上させるための評価シート（振り返りシート）を作成した。そのことで、授業の理解度が高まり、結果として授業の質が向上したと感じている。次年度も継続していく。

○自己評価

例年と同じく、授業全般の自己評価は納得のできる1年であったと思う。担当科目が実技と演習が多いため、自己評価をするための授業評価（FD アンケート）がなかったのであくまでも自己評価にはなるが、学生の授業に取り組む姿勢や出来も良く、反応も上々であったように感じている。

II 研究活動

○研究課題

（仮）中学校保健体育科教員による器械運動の実態：質問紙の調査結果から指導の在り方について

○目標・計画

【目標】

上記の学術論文を「原著論文」として国内の学会誌に投稿し、アクセプトされるよう励む。

【計画】

研究日や夏季・春季休暇期間を利用して、研究活動を行う。加えて、年1本以上は何かしらの論文を投稿する。

○2016年4月から2024年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・西尾敦史、大勝志津穂、尚爾華、小島正憲ほか『人間健康学』唯学書房、2023年、118～127頁

（学術論文）

- ・小島正憲『マット運動における指導法の一考察—マット運動【倒立編】—』東邦学誌第45巻第2号、2016年、1～14頁
- ・橘廣、長谷川望、小島正憲『「教職実践演習」を中心とした教職科目の検討：アクティブラーニングの視点から』東邦学誌第46巻第1号、2017年、103～118頁
- ・小島正憲『倒立姿勢の「腰が反る」動作を改善するための事例的研究—マット運動から—』東邦学誌第46巻第2号、2017年、79～92頁
- ・小島正憲『保健体育科教員を対象にした器械運動の意識調査—マット運動について—』東邦学誌第49巻第1号、2020年、1～9頁
- ・小島正憲『ラジオ体操の実施効果における調査研究—大学生を対象として—』東邦学誌第49巻第2号、2020年、13～20頁
- ・MASANORI KOJIMA, YOSHINORI KINOMURA, KENJI KUZUHARA, Development of observational indicators for evaluating handstand posture in the mat exercise in physical education class: validity and reliability, Journal of Physical Education and Sport® (JPES), Vol 21 (Suppl. issue 3), Art 266 pp 2087 - 2096, July.2021 online ISSN: 2247 - 806X; p-

ISSN: 2247 - 8051; ISSN - L = 2247 - 8051 © JPES

- ・小島 正憲、小島 万弓、松尾 亜美『中学校保健体育科教員を対象にした器械運動授業の意識調査－跳び箱運動－』東邦学誌第 50 巻第 2 号、2021 年、1～8 頁
- ・小島 正憲、小島 万弓、松尾 亜美『倒立静止における事例的研究』東邦学誌第 51 巻第 1 号、2022 年、53～59 頁
- ・小島正憲『ラジオ体操第二の運動効果における継続的調査－大学生を対象として－』東邦学誌第 52 巻第 1 号、2023 年、1～7 頁
- ・小島正憲『音楽聴取がスポーツパフォーマンスに与える情動変化－授業時の大学生を対象として－』東邦学誌第 52 巻第 1 号、2023 年、1～11 頁

(学会発表)

- ・小島正憲『音楽が体育実技に与える心理的作用－学生を対象としたアンケート調査－』第 64 回東海体育学会、2016 年、名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎、口頭発表
- ・小島正憲『マット運動における倒立の指導法について－新たな指導法「ヤジロベエの導入」－』第 65 回東海体育学会、2017 年、皇學館大学（三重県伊勢市）、口頭発表
- ・小島正憲、木野村嘉則、葛原憲治『初心者倒立における評価指標の提案－体育授業における倒立運動の評価を目指して－』第 68 回日本体育学会、2017 年、静岡大学静岡キャンパス、ポスター発表
- ・小島正憲『器械運動における保健体育教員の意識調査－中学校を対象にして－』第 33 回日本体操競技・器械運動学会大会、2019 年、駒澤大学駒沢キャンパス、一般発表

(特許)

なし

(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

申請していない。

○所属学会

日本体育学会（体育科教育、コーチング、バイオメカニクス）、スポーツ運動学会、スポーツパフォーマンス学会、日本体操競技・器械運動学会、日本幼児体育学会、日本教科教育学会

○自己評価

本研究（中学校保健体育科教員による器械運動の実態：質問紙の調査結果から指導の在り方）については、期限までに執筆することができなかつたため、次年度の投稿を目指して進めていく。

ちなみに、現在の進捗状況はアンケートの回収とデータの打ち込み、その後のデータ分析はできている。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

今年度は「教職支援センター運営委員会（副委員長）、中高教職課程部会（委員長）」に配属され、役職を授かった。本学部において教員の養成は柱の一つであることを念頭に置きつつ、長としての役割を全うできるようさらに力を入れて臨んでいく。

【計画】

教職を目指す学生には授業や特別講座の中で、教員の魅力を熱く伝えていく。そのことで、教職志望者の母数を増やしていけるように努力する。

○学内委員等

教職支援センター（副委員長）、中高教職部会（委員長）

○自己評価

上記の目標は概ね達成できたと考えているため、満足している。具体的に中高教職部会では、委員長として会議を建設的及び効率的に運営することができ、特別講座においても学生に向けた教採対策をすることができたと考える。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

「東邦学園地域総合型スポーツクラブ（体操教室）」は今年で5年目を迎えられた。今後も長く続けられることと、地域の方に認められる教室になる目標を持って、積極的な活動をしていく。

【計画】

コロナ感染が少しずつ落ち着いてきているので、「東邦学園地域総合型スポーツクラブ（体操教室）」「日進子ども大学（体操教室）（依頼を受け受理した）」などの対外的な活動に力を入れていき、依頼があれば積極的に受けていく。

○学会活動等

なし

○地域連携・社会貢献等

昨年はコロナの影響で、予定通りに「東邦学園地域総合型スポーツクラブ（体操教室）」を開講することができなかった。しかしながら、今年度はほぼ予定通りに教室を行うことができた。

加えて、依頼された日進市との連携事業である「子ども大学にっしん」と「教員に向けた器械運動指導の講習会及び子ども達に向けた体操教室（本庄小学校）」を開講することができた。

○自己評価

昨年はコロナ禍のため、思うように活動することができなかった。しかしながら、今年は「東邦

学園地域総合型スポーツクラブ（体操教室）「子ども大学にっしん」「教員に向けた器械運動指導の講習会及び子ども達に向けた体操教室（本庄小学校）」の運営ができ、良い指導をすることができたと考えているので満足している。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

VI 総括

昨年と同様に今年も、「授業」「学生指導」「委員会」「地域連携」の校務をバランスよく行うことができたので、概ね満足できる1年であった。しかしながら、研究面においては校務等による多忙を理由に、あまり満足のいく研究成果を収めることができなかつたので、反省する。

次年度は昇任（教授と学部執行部）が認められ、さらに多忙になる事が予想されるので、昨年度に執筆できなかつた研究は効率的に進められるよう、より綿密な計画を立てて取り組んでいく。加えて、科学研究費や研究助成金が獲得できることを目指す。

以 上